

プロジェクト報告書

団体名 特定非営利活動法人 こどもと文化協議会・プラッツ

1. プロジェクト名

こども向け社会教育プログラム『こどもが考えつくりあげる都市・ミニ立川』

2. プロジェクトの目的とその背景

地域社会が崩壊し、子どもを取り巻く地域での子育て環境が激変。子どもの教育は、学校と家庭のみに偏り地域教育の必要性が叫ばれる中、方法や体制が全国的に模索されている。本地域では、地域子育て応援のため廃校小学校がたまがわ・みらいパークとして、子ども対象の施設と位置づけられ、昨年その活動がスタート、活動の充実が望まれている。

昨年第一歩として、こどものための社会教育プログラム・ミニ立川を実施、10人の青年ボランティアスタッフと20人の子どもスタッフ(5年生が主流)が活動に継続的に参加する体制ができた。この子どもたちが5、6年後に高校生になったとき、今度は彼らが機軸となり小学生のサポートができる「持続的な地域での子どもの社会教育活動づくり」につなげていくための基礎として、プログラム開発を行いながら、実践を通しノウハウを蓄積する。

3. プロジェクトの内容

- 4月: 企画準備・新青年ボランティアスタッフ募集、講習会、研修会
子供向け・まち学習&新聞づくりワークショップ(以下WS)企画・立案、プログラムづくり研修
- 5月~7月: 新子どもスタッフ募集、まち学習 職安、市役所(市民、都市計画、商工、公園緑地、農政、文化課)を取
材。ヒアリング内容まとめ、ミニ立川こどもまち学習新聞作成、ミニ立川仕組みづくりWS研修
- 8~9月: 実施の子ども向け・ミニ立川の仕組みプログラムづくり研修+アート制作研修
- 9月: まち学習を基盤に、ミニ立川の企画・仕組みづくりを考える子どもWS。
- 10~11月: 制作準備 ミニ立川で実施する模擬施設や店舗のアート制作
- 11月: 一般参加の子どもを募集して、子どもスタッフが運営するミニ立川実施
こどもスタッフ振り返りWSのプログラムづくり研修
- 12月: 「ミニ立川2008」子ども振り返りワークショップ+報告新聞制作
- 1~2月 翌年の子供向け体制&目標づくりWS。プログラムづくり研修
- 3月: 「ミニ立川2」実施準備、3月28/29日実施

4. プロジェクト実施にあたっての工夫点とその効果

- 子どもが、学校と家庭以外の日常の居場所ができるようにする。
効果: 子どもたちは「子どもスタッフ」として登録し、各自にみらいパークのスタッフと同じ名札を渡し、子どもたちもスタッフの自覚が出来、みらいパークを居場所として気持ちよく参加している。子どもたちの創意工夫を取り入れ、認め、話を聞いていくことや、命令的でなく話し合っていくことを続けて、互いの信頼感が深まっている。
- 参加する子ども同士、異年齢の交流とコミュニケーション、協調性が生まれる
効果: 低学年と高学年が共存できるか心配はあったが、低学年は上をみてやる気を出し、高学年もちゃんと下の子どもたちの面倒を見ている。意見や話し合いは、自然に対等に行っていて、作業の協力もよくしている。これらは大人の指導というよりも子どもたちの能力の高さであり、それが発揮できる場となってきていると思う。6年生も4月から中学生になり、来られるか心配だったが、時間があると「いつものように」来ているので、つないでいきたい。
- 体を使ったダイナミックアート体験でバランスの取れた、実体験の遊び環境を創出させる。
効果: ゲームを持ってくる子もいたが、実体験の方が面白く有意義なことを子どもたち自身も自覚できている。子どもたちでの話し合いで、ゲームや携帯電話の持ち込みを制限したりと、自分たちで決めていけるようになっている。

5. 全体的所感、終了しての感想など

昨年以上に、こどもたちの集中力は素晴らしく、時間の余裕がない中で大きな成果を上げられた。特に横浜での「こどものまち EXPO」に3名の子どもスタッフが参加し、ミニ立川の発表、他市との交流などあった後での意識の変化が大きい。

やりたいことが多く、欲求不満もあり、急きょ3月末に今年度2回目のミニ立川を単独開催し、レストランや映画づくりなど、新しい試みに発展できたことも素晴らしかった。

反面、たまがわ・みらいパークという様々な事業を行っている場での「ミニ立川」実施は、大人の考え方や立場の相違などから十分な理解と協力が得られない部分もあり、「大人」の難しさが大きく表面化したと言える。同じ大人として、子どもたちとの付き合い方、子どもたちへの託し方を常に意識し、慎重にかつ大胆に、子どもたちの未来を育てたいと思います。

6. 参考資料

参考資料あり

